

名誉教授阿部謹也著作目録(抄)

- |          |   |          |                                    |
|----------|---|----------|------------------------------------|
| 一九六六年十二月 | 訳書『オットー・ヒンツェ』『封建制の本質と拡大』、未来社  | 一九八一年三月  | 著書『中世の窓から』、朝日新聞社                   |
| 一九七〇年十一月 | 訳書(共訳)『ヘルムート・シエルスキー』『大学の孤独と自由—ドイッツの大学ならびにその改革の理念と形態』、未来社                          | 四・五月     | 著書(共著)『中世の風景』(上・下)、中央公論社           |
| 一九七二年    | 著書『Die Komturei Osterode des deutschen Ordens in Preussen 1341-1525. Grote, Köln』 | 一九八二年六月  | 著書(共著)『中世の再発見—市・贈与・宴会』、平凡社         |
| 一九七四年七月  | 著書『ドイッツ中世後期の世界—ドイッツ騎士修道会史の研究』、未来社   | 一九八三年七月  | 著書『中世の星の下で』、影書房                    |
| 十月       | 著書『ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界』、平凡社  | 一九八四年十二月 | 著書『世界子どもの歴史—中世』、第一法規出版             |
| 一九七五年四月  | 訳書『ヘルマン・ハインベル』『人間とその現在—ヨーロッパの歴史意識』、未来社  | 一九八五年四月  | 著書『歴史と叙述—社会史への道』、人文書院              |
| 一九七八年六月  | 著書『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描』、平凡社   | 七月       | 訳書『放浪学生ブラッターの手記—スイスのルネサンス人』、平凡社    |
| 十月       | 著書『刑事史の社会史—中世ヨーロッパの庶民生活』、中央公論社  | 一九八六年三月  | 著書『逆光のなかの中世』、日本エディタースクール出版部        |
|          |   | 七月       | 著書『よみがえる中世ヨーロッパ(NHK市民大学)』、日本放送出版協会 |
|          |   | 一九八七年七月  | 著書『甦える中世ヨーロッパ』、日本エディタースクール出版部      |

- 十月 著書『中世賤民の宇宙—ヨーロッパ原点への旅』、筑摩書房
- 一九八八年三月 著書『自分のなかに歴史をよむ』、筑摩書房
- 一九八九年一月 著書『西洋中世の罪と罰—亡霊の社会史』、弘文堂
- 九月 著書『社会史とは何か』、筑摩書房
- 一九九〇年二月 著書『歴史を読む—阿部謹也対談集』、人文書院
- 五月 訳書『ティル・オイレンシュピエゲルの愉快ないたずら』、岩波書店
- 一九九一年一月 著書『西洋中世の男と女—聖性の呪縛の下で』、筑摩書房
- 十一月 著書『ヨーロッパ中世の宇宙観』、講談社
- 一九九二年三月 編著『私の外国語習得法』、悠思社
- 四月 訳書(共訳)エーディト・エンネン『中世の女たち』、人文書院
- 十月 訳書(共訳)ジャック・ロシオ『中世娼婦の社会史』、筑摩書房
- 十二月 著書『西洋中世の愛と人格—「世間」論序説』、朝日新聞社
- 一九九三年九月 著書『読書の軌跡』、筑摩書房
- 一九九四年十一月 訳書ヴェルナー・フォーグラ―編『修道院のなかのヨーロッパ』、朝日新聞社
- 一九九五年七月 著書『「世間」とは何か』、講談社
- 十月 著書『ヨーロッパを読む』、石風社
- 十月 著書『北の街にて』、講談社
- 一九九六年三月 著書『ヨーロッパを見る視角』、岩波書店
- 一九九七年三月 著書『読書力をつける』、日本経済新聞社
- 五月 著書『「教養」とは何か』、講談社
- 一九九八年五月 著書『物語ドイツの歴史』、中央公論社
- 一九九九年三月 著書『日本社会で生きるということ』、朝日新聞社
- 五月 著書『大学論』、日本エディタースクール出版部

編集後記



本号は、特集 ヨーロッパ社会史の世界である。実質的な編集は、土肥恒之、阪西紀子両先生にお願いした。

(水野忠恒)

本号は昨年十一月末をもって停年退官された前学長、阿部謹也名誉教授を記念して編まれた特集号です。この企画を快諾された編集委員会に厚くお礼申し上げます。

さて阿部先生の学問については、改めてご紹介するまでもなくよく知られており、また専門家以外の愛読者の多さには驚かされます。ヨーロッパ中世世界、そこに生きた人々の生活と心性が先生の鋭い分析と瑞々しい文章によって活写されるわけですが、その魅力の一つは具体的な生にかかわるものだけが学問的な手続

きを経て描かれているところにあるように思われます。私はいまでもよく本屋巡りをしていますが、三年程前新宿のK書店が新店舗を出したというので、さっそく立ち寄ったことがあります。洋書の階で新刊本をながめていると『乞食と教授——一六世紀家族のサガ』という表題が目にとまりました。著者はフランスの著名な社会史家です。これはとって手に取ると案の定、先生が十年以上も前に翻訳・紹介されたトマス・ブラッターとその息子についての研究でした。ここに示されているように、先生のお仕事はいわゆる「翻訳史学」とはまったく無縁で、いずれも先駆的なものです。そして一貫してご自身の内なる関心に忠実であられる点に最大の特色があります。そのことによっていつも歴史学の最先端に立っているのだと思います。(土肥恒之)

かつて私がデンマークに留学している時に、阿部先生に学生寮の「廊下の集会」について書き送ったことがあった。「留学中にいい経験をした学生がいます」として、先生が講演の中で紹介している

のを読んだ時には、正直うれしかった(人の悪いことに、私には一言もおっしゃらなかった)。今回、論集に執筆するにあたって、私自身ずっと気になっていた問題でもあり、臨時の集会を取り上げることにしたものの、うまくまとまらず、文字どおり冷や汗ものである。「経験だけれども、ダメじゃないですか」というお叱りが聞こえて来そうな気がして(もともと、近年とみに穏やかに(?)なられて、黙って呆れられるだけかもしれない)。自分にそんな資格があるのかと自問しつつも、教師の立場でゼミの学生と接するようになって思うのは、特に学部生であった頃の私たちと付き合うために、先生はとてつもないエネルギーを必要とされていたのではないかとということだ。それなりに真剣ではあったけれど、今にして思えばとんでもない学生たちと一緒に、ゼミ合宿へ、手白沢温泉へとよくも出掛けてくださったものだ。それらすべてを含めて、心より感謝しております。

(阪西紀子)